

# 関西大学『国文学』 第一号—第九十九号 総目次

## 第一号 一九五〇年五月発行

起頁終頁

「偲ふ」と「忍ぶ」

筑前國志賀白水郎歌十首異見

古事記に於ける出雲關係記載の一考察

和名類聚抄二十卷本の原形

袖中抄における萬葉語の研究

—特にその方法的考察—

建禮門院右京大夫考(一)

西鶴の説話とアーチ形プロット

## 第二号 一九五〇年十月発行

頼原博士追悼近世文學特集

頼原退藏先生略年譜

「男色大鑑」の研究

芭蕉に於ける新古今的なものについて

近世小説様式論

蕉門の成立

頼原博士遺愛・元祿歌舞伎狂言本七種について

澤瀉久孝

一 一五

釜田喜三郎

六 一四

横田健一

一五 三三

秋本吉郎

三三 四四

吉永 登

四五 六五

飯田正一

六六 七四

金子又兵衛

七五 八〇

金子又兵衛

一 一九

小島吉雄

一〇 三三

暉峻康隆

二三 三六

西山隆二

三七 五三

野間光辰

五四 六七

「旅寝論の調査」

—「篇突論」「許去論評解」を中心として—

西吟の研究

—宗因・西鶴との關係を中心として—

## 第三号 一九五一年二月発行

萬葉集本文批評の或る場合

蓼太研究

—俳書から見た蓼太の足跡—

「海潮音」の役割

接尾語ラマの考

—書紀の古訓をめぐって—

連接の原理

奈良朝特殊語法「ずは」について

「雨月物語」讀後

## 第四号 一九五一年六月発行

杜甫と芭蕉(一)

『安井夫人』ノート

みちくの島の椰子山女

—堤中納言物語「よしなし」と—

山崎喜好 六八 九三

田中義眞 九四 一〇二

小島憲之 一一 二二

中村俊定 二二 二九

榊原美文 三〇 三九

阪倉篤義 四〇 五〇

林和比古 五一 六〇

吉永 登 六一 七四

谷沢永一 七五 八三

堀 正人 一一 三三

稻垣達郎 二三 三五

長谷川信好 三六 四二

連体格から連用格へ

— 所謂「に」に通じる格助詞「の」の一解 —

土部 弘 四三 五〇

浄瑠璃評判記解説(一)

横山 正 五一 五五

近松の「傾城反魂香」のテキスト試案

吉永孝雄 五六 七〇

第五号 一九五二年九月発行

上代文学特輯

「さる」攷

澤瀉久孝 一九

奈良朝語訓釋斷片

大野 晋 一〇 二

— 訓點語の利用による —

「萬葉人の文學表現」ひとつ

小島憲之 三三 三

「らむ」について

佐伯梅友 三三 四

輕郎女から磐媛皇后へ

吉永 登 四三 五

— 「君が行きけ長くなりぬ」の歌について —

凡浪考

佐竹昭廣 五四 五九

「万葉類葉抄補欠」完本の發見

羽倉敬尙 六〇 六

第六号 一九五二年二月発行

枕草子本文整理札記(一)

山脇 毅 一九

夷がきの芸態

盛田嘉徳 二〇 三

來山の集について

飯田正一 三三 四五

西鶴用語小考

前田金五郎 四六 五

『好色一代女』の老女のかくれ家ゝの挿絵に就いて

中野眞作 五三 六〇

浄瑠璃評判記解説(二)

書評 小久保実著『堀 辰雄』

横山 正 六二 六三  
谷沢永一 六四 六四

第七号 一九五二年六月発行

「軽み」作風に就いての芭蕉の教説

廣田二郎 一七

伊勢蕉門

西山隆二 一八 三三

齋藤茂吉の作歌の態度

谷澤永一 三四 五八

浄瑠璃評判記解説(三)

横山 正 五九 六

第八号 一九五二年十月発行

「はしけやし」から「はしきよし」へ

吉永 登 一 二

上代文献に於ける「野」字の訓

濱田數義 一四 二三

藤原資国は大鏡作者に非ず

平田俊春 二三 三三

安藤年山の学的系譜

久保田收 三四 四一

孤屋「野さらし乃紀行」の價值

彌吉菅一 四二 四五

關更の俳風

鈴木重雅 五六 六

齋藤茂吉研究文献目録(一)

六二 六四

第九号 一九五三年一月発行

天武天皇御製攷

澤瀉久孝 一 八

枕草子本文整理札記(二)

山脇 毅 九 二四

秋成の舊作と雨月物語

後藤丹治 二五 三六

— 世間袋 姿形氣の再現 —

俳諧的文章

— 西鶴文体論序説 —

茂吉寫生論と小山画譜

齋藤茂吉研究文献目録(二)

第十号 一九五三年四月発行

淡路島の位置

— 創世神話における —

倭名類聚抄と漢字文化

流布本保元平治物語の成立を論じて太平記の成立に及ぶ

芭蕉の虚構について

幻住庵入庵前後の芭蕉

— 軽みへの志向 —

児童文學の本質

— 研究序説的考察 —

第十一号 一九五三年八月発行

萬葉の修辭

— 二重の序について —

かたみの衣考

中世に於ける宇津保物語の卷序

「花櫻をる少將」

「守武千句」の跋について

村田 穆 三七 五三

宇澤甚吾 五四 五九

六〇 六四

守屋俊彦 一六

秋本吉郎 七一 七六

釜田喜三郎 一七 三〇

笠井 清 三三 三八

尾形 仂 三九 四八

林 一夫 四九 五九

伊藤 博 一〇

吉永 登 二一 二四

山脇 毅 一五 二九

島田退蔵 三〇 三六

飯田正一 三九 五〇

「奥の細道」のリリシズム

提示格の「の」の或る場合

書評

伊藤整著「生活と文体について」

北山茂夫著「萬葉の世紀」

第十二号 一九五四年四月発行

枕草子本文整理札記(三)

とりかへばや物語と先行文學

— 狭衣物語との関係 —

芭蕉用語小考

主体意識を中心とした「連用中止法」の考察

菟餓野の鹿と免寸河の巨樹

— 説話における合理性の喪失 —

第十三号 一九五五年二月発行

記紀歌垣の歌順をめぐって

芭蕉の忍摺・葛城山の句文について

假名垣魯文

— 作家的展望 —

「日のおちほ」考

金子又兵衛 五一 五五

土部 弘 五五 六〇

谷澤永一 六一 六二

神堀 忍 六一 六三

山脇 毅 一一 一五

鈴木弘道 一六 二三

前田金五郎 二四 三三

菊田妙子 三三 四四

吉永 登 四五 五〇

西宮一民 一一 一〇

阿部喜三男 一一 一六

輿津 要 一七 二八

明石利代 二九 四〇

第十四号 一九五五年六月発行

枕草子本文整理札記(四)

也有の草庵生活とその文学

石橋忍月の文学意識

私小説の成立(一)

山脇 毅	一	一六
岩田九郎	一七	三三
谷沢永一	三四	四八
小久保実	四九	六二

第十五号 一九五五年十二月発行

再び三山歌について  
—大濱巖比古氏の批判に答へる—

「あそぶ」の古義

枕草子本文整理札記(五)

古今集「不戚抄」の逸文について

私小説の成立(二)

下河辺長流年令考

吉永登氏著「万葉—その異伝発生をめぐって」を読む

吉永 登	一	一八
犬塚 旦	九	一六
山脇 毅	一七	二八
東郷富規子	二九	三六
小久保実	三七	五二
羽倉敬尚	五三	五三
釜田喜三郎	五四	五八

第十六号 一九五六年六月発行

「歌よみに與ふる書」の文学意識

形容詞「大きい」の系譜

采女考

几童関係の一資料

谷沢永一	一	一四
大安 隆	一五	三四
植田篤子	三五	四七
飯田正一	四八	五二

第十七号 一九五七年四月発行

再び民族文学といふものの限界に就いて  
—萬葉「志賀白水郎歌」諸説を読む—

枕草子本文整理札記(六)

逍遙鷗外対立の根源

額田王年齢考

釜田喜三郎	一	二二
山脇 毅	二三	二八
谷沢永一	二九	四五
森川 修	四六	五六

第十八号 一九五七年七月発行

枕草子本文整理札記(七)

鷗外「舞姫」の発想

日本におけるヴァレリイ文献目録

書評 榊原美文氏著「近代日本文学の研究」

第十九号 一九五七年十月発行

山脇 毅	一	一八
谷沢永一	一九	二三
宮中市子	二四	五九
和田繁二郎	六〇	六一

天若日子の神話について

浜松中納言物語は果して天喜三年以前の作か

—冷泉院考—

真淵の歌論における詩経への関心  
—後期の歌論について—

「木の葉駒集」と「再興木葉駒」

「若氣勸進帳」と「滑稽詩文」  
—日本男色文学文献解説(一)—

コトバ違い二題  
—隠岐方言昔話採録手帳その2—

守屋俊彦	一	一一
鈴木弘道	一二	一九
宇佐美喜三八	二〇	二七
飯田正一	二八	三五
金子又兵衛	三六	四四
土部 弘	四五	六三

書評 澤瀉久孝博士著「萬葉歌人の誕生」

木下正俊 六四 六七

第二十号 一九五八年一月発行

旭周編輯稿本「翁句集」について

飯田正一 一 二三

「小説神髓」の文学意識

谷沢永一 一三 三〇

石川啄木のローマ字日記について

春日敏晴 三 四三

動詞未然形の性格

石田春昭 四四 五八

書評 吉永登氏著「萬葉集」古典とその時代Ⅱ

秋本吉郎 五九 六二

第二十一号 一九五八年四月発行

中皇命の歌その他

吉永 登 一 一六

雄長老伝参考補正

小高敏郎 七 一八

『寛政三年埴郷日記』の方法

飯田正一 一九 三三

西鶴武家物の素材

小谷省三 三四 四一

連体格用法の(不)は連体形なりや

土部 弘 四三 五七

—源氏物語における(不)の接続—

「狂雲集」註解(一一)

金子又兵衛 五八 六五

西岡 宸 五八 六五

第二十二号 一九五八年七月発行

古日は果して憶良の子か

吉永 登 一 一六

枕草子本文整理札記(八)

山脇 毅 七 一六

『奥の細道』の写実性について

阿部喜三男 一七 二二

西鶴と団水

神堀貞子 三三 三四

—その慣用語と慣用語をめぐって—

土橋良恵

飯田正一 三五 四四

若き鷗外の思考態度

谷沢永一 四五 五九

—「傍観機関」の論理構造—

『狂雲集』註解(一二)

金子又兵衛 六〇 六四

西岡 宸 六〇 六四

第二十三号 一九五八年十月発行

三山歌解釈の否定的反省

吉永 登 一 一七

枕草子本文整理札記(九)

山脇 毅 八 一七

古代短歌史の終着点

風巻景次郎 一八 二六

—藤原俊成によって把握されたもの—

『楢葉和歌集』

金子又兵衛 二七 三九

—日本男色文学文献解説(二)—

西鶴と芸能

中野真作 四〇 四六

土橋良恵 補遺

飯田正一 四七 五二

上田秋成の物語観

中村幸彦 五三 六〇

蕪村と暁台との交渉

丸山一彦 六一 七一

『狂雲集』註解(一三)

金子又兵衛 七三 七七

西岡 宸 七三 七七

関西大学国文学会雑誌目録(二)(昭和33年9月現在)

第二十四号 一九五九年一月発行

天武天皇における天照大神と神武天皇

— 人麿作歌の背景として —

吉永 登 一六

枕草子本文整理札記 (一〇)

山脇 毅 七一七

枕草子校註私見

三宅はる子 一八 二五

『好色』二代男』の文体

神堀貞子 二六 三三

西鷺と西鶴に関する臆説

吉江久彌 三四 四八

— 「色道大鼓」追加の考察から西鶴文学の一つの転機にふれて —

其角と晩年の芭蕉

飯田正一 四九 五六

太宰治『人間失格』の構成

谷沢永一 五七 六八

『狂雲集』註解 (四)

金子又兵衛 六九 七五

国文学 第一号—第二四号 分類総目次

西岡 宸 七六 八〇

昭和三十三年度(第二一号—第二四号) 総目次

第二十五号 一九五九年四月発行

高市皇子と瀬田の会戦

吉永 登 一 四

枕草子本文整理札記 (一一)

山脇 毅 五一 五

岩野泡鳴の文学思考

谷沢永一 二六 三三

『雨が降る』といふ言ひ方

木下正俊 三三 三六

現代手紙の文調

佐伯哲夫 三七 四六

— ていねい調の場合 —

『狂雲集』註解 (五)

久松潜一博士の『萬葉集とその前後』

金子又兵衛 四七 六

『萬葉集、注釈卷第三』を読む

西岡 宸 六二 六四

第二十六号 一九五九年七月発行

歌謡の轉用

吉永 登 六五 六七

— 倭建命葬歌の場合 —

大君の命かしこみ

神堀 忍 一 一〇

— 「大君のまけのまにまに」と「大君の命にされば」と —

枕草子本文整理札記 (一二)

井村哲夫 二 一七

多武峯少将物語の成立年代について

山脇 毅 一八 三〇

— 登場人物とその史実 —

『三籟集』と宗春の発句帳

吉原栄徳 三 三九

自然主義時代の片上天弦

飯田正一 四〇 五〇

『狂雲集』註解 (一六)

谷沢永一 五一 六三

第二十七号 一九五九年十月発行

金子又兵衛 六三 六九

山脇博士古稀記念特集 その一

山脇毅博士略歴並業績

柿本 奨 一 二

蜻蛉日記中の歌とその詠み人

清水 泰 二 一八

源氏物語の継子型要素

原田芳起 一九 二七

源氏物語漢語彙弁証

源氏物語漢語彙弁証

明石上に現われた紫式部の俳 竹内美千代 二八 三六

「宰相の君は北野の三位のよ」について 長谷川信好 三七 四二

六代勝事記私見 後藤丹治 四三 四八

真淵の前期の歌論と音楽思想 宇佐美喜三八 四九 五六

歌語「なれや」考 宮田和一郎 五七 六七

『狂雲集』註解(七) 金子又兵衛 六八 七四

第二十八号 一九六〇年一月発行

山脇博士古稀記念特集 その二 吉永 登 一 一六

万葉集巻八編纂の意図とその時について 神堀 忍 七 一五

古事記歌謡における挽歌的なるもの — 記紀歌謡における「あはれ」の語義をめぐって — 風巻景次郎 一六 二七

源氏物語の成立に関する試論 — 四年間の休業の後、この試論を再開するについての口上 — 飯田正一 二八 三五

石津亮澄とその歌集 土井忠生 三六 四四

サンタス御作業抄 山脇 毅 四五 五五

枕草子本文整理札記(一一三) 前田金五郎 五六 六三

西鶴・近松用語雑考 金子又兵衛 六四 七四

『狂雲集』註解(八) 西岡 宸 七四 七九

関西大学文学論集 国文学関係論文 分類目次 七七 七八

関西大学学報 国文学関係論文 分類目次 七九 八〇

昭和三十四年度(第二五号—第二八号) 分類総目次

第二十九号 一九六〇年十月発行

風巻景次郎博士追悼号 吉永 登 一 一七

「楯立つらしも」の背後にあるもの 秋本吉郎 八 一五

和銅六年五月甲子の官命 土橋 寛 一六 二六

「タマ」の姿 阿部秋生 二七 三六

勅撰和歌集の詞書の立場 藤岡忠美 三七 四六

平兼盛伝記考 山脇 毅 四七 五七

枕草子の書名成立に関する私見 秋山 虔 五八 六六

「若菜」巻の問題ひとつ 玉上琢弥 六七 七五

— 源氏物語の方法に関する断章 — 安良岡康作 七六 七九

隆能源氏絵詞「蓬生」鑑賞 谷山 茂 七九 八七

中世文学研究の課題 後藤重郎 八八 九六

葉室家と俊成 本位田重美 九七 一〇六

新古今和歌集撰者名註記に関する資料について 神田秀夫 一〇七 一一五

後堀河院民部卿典侍集覚書 野田寿雄 一一六 一二三

兼好研究の一コマ 宇佐美喜三八 一二三 一二八

「恨の介」と「薄雪物語」 飯田正一 一二九 一三五

真淵の歌論と古文辞学 平井昌夫 一三六 一四二

来山と其角

「文」の特色についての考察

風巻景次郎先生を偲びて

風巻教授をいたむ

風巻君と絵画

風巻君を憶う

追憶

風巻景次郎君を憶ふ

風巻先生回想

風巻を思う

晩年の風巻教授

枕詞のマジック

風巻景次郎略伝

第三十号 一九六一年三月発行

枕草子本文整理札記(一四)

おくのほそ道考

——清濁の問題——

自然主義文芸評論研究前史

文脈と構成(一)

——「文章組成論」の試み——

時語に関するおぼえがき

貧窮問答歌の論

——白氏秦中吟重賦との比較的考察を通じてその貧窮の本質に及ぶ——

昭和三十五年度(第二十九号・第三〇号) 分類総目次

第三十一号 一九六一年十一月発行

二つの新説を疑う

枕草子本文整理札記(二五)

大阪蕉門の成立

文脈と構成(二)

——「文章組成論」の試み——

第三十二号 一九六二年三月発行

近江朝作家素描

憶良の手法と遊仙窟

枕草子本文整理札記(二六)

おくのほそ道語彙あれこれ

自然主義文芸批評の屈折

昭和三十六年度(第三十一号・第三十二号) 分類総目次

第三十三号 一九六二年六月発行

古代文学に現はれたる出雲の特殊性

——古事記における出雲伝承の長歌をめぐって——

「今たたらし」

枕草子本文整理札記(二七)

明治三十年前後文学状況研究史覚書

自然主義後期の思出

——附・谷沢永一君著「大正期の文芸評論」書評——

井狩正司 一四三—一四四

池田弥三郎 一四四—一四五

江口彰次 一四五—一四六

高木市之助 一四六—一四八

野田寿雄 一四九—一五〇

久松潜 一五〇—一五一

和田謹吾 一五一—一五三

渡辺格司 一五三—一五四

飯田正一 一五四—一五六

風巻 融 一五六—一五九

風巻 春子 一六〇—一六四

山脇 毅 一—一三

板坂 元 一四—一三

谷沢永一 一三三—一三三

土部 弘 一三三—一四一

佐伯哲夫 一四二—一五〇

井村哲夫 一五一—一六〇

吉永 登 一—一八

山脇 毅 九—二四

飯田正一 一三五—一五二

土部 弘 一五三—一六七

中西 進 一—一四

吉永 登 一五—二二

山脇 毅 二三—三六

板坂 元 三七—四五

谷沢永一 一四六—一六七

神堀 忍 一—一三

吉永 登 一三—二八

山脇 毅 二九—四三

谷沢永一 四四—六六

木村 毅 六七—七七



柳田国男の「学問」について

山下澄子 七六九

第三十四号 一九六三年六月発行

語部とその遺制

神堀 忍 一一〇

—古事記歌謡における「神話」「天語歌」をめぐって—

高橋虫麻呂

井村哲夫 三二九

—その閨歴及び作品の製作年次について—

枕草子本文整理札記(一八)

山脇 毅 三〇四

石川淳試論

山下澄子 四四五

第三十五号 一九六四年一月発行

Engelst 憶良

井村哲夫 一一〇

—作品形成の契機としての性情論—

枕草子本文整理札記(一九)

山脇 毅 二二三

近松浄瑠璃文体の批評的要素

松平 進 三三三

国語教育の今日的課題

畑 耕栄 三三四

—読解指導過程をめぐって—

秋本吉郎校注『風土記』書評

植垣節也 四三四

日本古典文学大系『太平記』一・二書評

高橋貞一 四六五〇

鈴木弘道著『平安末期物語の研究』書評

原田芳起 五〇五

遠藤著共著『新編現代文事典』書評

畑 耕栄 五七六

齋藤聖一郎  
小島章雄『古今和歌集・新古今和歌集』書評

小沢正夫 六一六五

小島憲之著『上代日本文学与中国文学』上書評

水原渭江 六五六

栗林章著『万葉と難波』書評

大養 孝 六九七〇

中道正雄著『あなたも記者だ—ニュースの常識—』書評

田宮 武 七〇七三

『大坂女子  
大学蔵』日本英学資料解題』著者索引

天野敬太郎 1 9

第三十六号 一九六四年六月発行

間人皇后考

神堀 忍 一一四

—中大兄皇子と孝徳帝をめぐる諸問題—

「草枕」の一面

玉井敬之 一五二五

△題材▽△趣意▽の関連性に見られる文章様式

土部 弘 二六三五

文学史家としての風巻景次郎

鷹津義彦 三六三八

—『日本文学史の研究』書評をめぐって—

北山茂夫・吉永登共編『日本古代の政治と文学』書評

井村哲夫 三九四一

後藤丹治・岡見正雄校注『日本古典文学大系』『太平記三』書評

山下宏明 四一四四

鳴上善治歌集『花に坐す』評

飯田正一 四四四五

石川啄木作品の外国語訳について

天野敬太郎 1 23

第三十七号 一九六五年一月発行

古代の結婚についての常識を疑う

吉永 登 一七

—間人皇女論追考—

大君の死をめぐって

西木忠一 八二一三

寢覚に於ける偽死事件  
—その発端と経過について—

〔梶久〕考

現代文の成分族構造

金谷 治『孟子』書評

金谷 治『秦漢思想史研究』書評

佐竹・木下・小島三氏  
『萬葉集』の射程と興行き

大西昭夫・多田敏男訳『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』書評

平野健次監修解説レコード『上方の端歌』

飯田正一校註『本朝水滸伝 後篇』書評

鰺刻『零柏集』

昭和三七・三八・三九年度  
(第三三・三四・三五・三六・三七号)

第三十八号 一九六五年八月発行  
分類総目次

特集・芥川龍之介

〔羅生門〕成立に関する覚書

芥川龍之介書誌案内

芥川龍之介全集未収録資料

芥川龍之介作品目録(別掲)中の初出誌未見・不明目録

鈴木弘道 一四 三三

中野真作 二四 三〇

佐伯哲夫 三三 四一

谷川英則 四二 四四

町田三郎 四四 四七

伊藤 博 四七 五四

西村 徹 五五 五七

吉川英史 五七 六〇

前田利治 六一 六三

吉永 登 六三 七六

林 健子 六三 七六

森本 修 一一 一六

天野敬太郎 一七 二四

森本 修 二五 五九

田熊渭津子 六一 六三

芥川龍之介作品の外国語訳について  
芥川龍之介作品目録(全集・文庫に於ける)

第三十九号 一九六五年十二月発行

「東の野にかぎろひの立つ見えて」  
西鶴と芭蕉

—談林克服への姿勢と背景をさぐる—  
雪之下草歌仙<sup>併</sup>—解題と翻刻—

契沖伝の新資料

芥川龍之介全集落穂拾い  
折口信夫の内的発想

「芥川龍之介全集未収録資料」補記

文章の基本様式

谷沢永一著『近代日本文学史の構想』書評

片山慶次郎 編集『京舞井上流歌集』書評  
平野健次 編

木下正俊 共編『補雅言集覧索引』(書評)

久山重正 著  
坂口兵司著『国語と日本語—国語学の対象(一)—』摘要

金谷 治訳註『論語』『荀子』『孫子』書評  
土部 弘 一〇八 一一四

飯田正一歌集『レンバン島』の抒情  
石井勉次郎 一一八 一二三

北村学戯曲集『歌人有情』寸評  
福岡新吉 一二三 一二五

大西昭夫 訳『ヘンリー・ジェイムズ』『智慧の樹』書評  
玉木意志太 一二五 一二六

多田敏男 訳  
萩原朔太郎作品の外国語訳について  
天野敬太郎 二五 三三

天野敬太郎 一七 三八

田熊渭津子 一 一六

吉永 登 一 一八

神堀貞子 九 二三

前田金五郎 二二 四〇

吉永 登 四一 四四

田熊渭津子 四五 六四

山下澄子 六五 八三

森本 修 八三 八三

土部 弘 八四 九七

保昌正夫 九九 一〇二

吉永 孝雄 一〇二 一〇五

天野敬太郎 一〇五 一〇八

土部 弘 一〇八 一一四

谷川英則 一二四 一二八

石井勉次郎 一二八 一二三

福岡新吉 一二三 一二五

玉木意志太 一二五 一二六

天野敬太郎 二五 三三

田熊渭津子 六一 六三

連体修飾語の構造

佐柏哲夫 1 24

第四十号 一九六六年十月発行

特集・明治文化研究会事歴

田熊渭津子編

『明治文化全集』新旧版対照総目次

三 九七

『明治文化』総目次

九八 一〇一

新版『明治文化全集』月報総目次

一〇二 一〇五

『新旧時代』

一〇六 一九四

『明治文化研究』総目次

一九五 一九九

『季刊明治文化』

二〇〇 二〇〇

『明治文化研究会』刊行本目録

二〇一 二一〇

『明治文化研究会例会』講演目録

二一一 二二〇

あとがき

二二一 二二三

第四十一号 一九六七年三月発行

『行き来と見らむ紀人ともしも』

吉永 登 一 八

薫大将考

西木忠 一 九 一七

—心の傾斜をめぐって—

鈴木弘道 一八 二六

無名草子と仏教

鈴木弘道 一八 二六

—特に法華経との関係を中心として—

義堂周信の文学観と詩風

藤木英雄 二七 四八

藤井竹外と『竹外二十八字詩』

北村 学 四九 五三

藤井専蔵著『俳句形態論』書評

吉永 登 五四 五五

念々の境涯性—歌集『丘の家』について  
明珍昇詩集『夕陽の柩』

竹村利雄 五五 五九  
右原 彪 五九 六〇

井原西鶴書誌案内

天野敬太郎 27 35

井原西鶴作品の外国語訳について

天野敬太郎 1 26

『國文学』第一号—第四一号 総目次

九七 一〇八

第1号—第41号 執筆者名索引

109 110

第四十二号 一九六七年十二月発行

歌経標式索引

林 健子 一 三三

『明治文化研究会事歴』補遺

田熊渭津子 三三 三八

『明治文化研究会』刊行本目録補遺

三九 三九

『文芸教育論』の史的位置

玉井敬之 四〇 四六

『文芸教育論』の史的校注

柴田 実 四七 四八

吉永 登著『万葉—文学と歴史のあいだ』

書評 大久保正 四九 五三

山脇 毅著『枕草子本文整理札記』書評

田中重太郎 五三 五五

大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』書評

水田紀久 五五 六四

北村 学著『竹外二十八字詩評釈』書評

長谷川雅樹 六四 六七

第四十三号 一九六八年三月発行

源氏物語の作風

清水好子 一 一八

—遠景の薫—

中巖圓月の人と作品

藤木英雄 一九 二八

戯画堂声ゆき

—上方の役者絵 (二) —

松平 進 二九 四八

葉山嘉樹と名古屋労働者協会

—資料紹介「街路に立ちて」「神戸労働争議エピソード」—

浦西和彦 四九 六五

葉山嘉樹宛小林多喜二島木健作 未発表書簡

浦西和彦 六六 七二

小久保 実著『堀辰雄論』書評

高見 伯 七三 七五

清水好子著『源氏の女君』書評

西木忠一 七五 七七

明珍 昇著『近代詩の展開』書評

吉田永宏 七七 七九

金谷 治著『老荘の世界』書評

藤木英雄 七九 八一

金谷 治著『孟子』書評

北村 学 八一 八二

東洋音楽選書 (三二)『箏曲と地歌』書評

谷沢永一 八三 八二

第四十四号 一九七〇年八月発行

已然形についての一・二の問題

吉永 登 一一 一二

「二」チエ書誌」に関する覚書

高松敏男 一二 三三

—移入史考察の試論として—

浦西和彦 三三 四二

「淫売婦」と『海に生くる人々』

谷沢永一 四三 四五

吉野作造博士論文随筆目録

田熊渭津子 四三 七五

第四十五号 一九七一年七月発行

吉永 登 一一 一八

海原は鷗立ち立つ

—うるはしとつづくし—

『浅猿』の太平記世界

—作者の属する階層、思想より四部構成説に及ぶ—

藤木英雄 九 三三

敬語句構成型の構文論的考察

佐伯哲夫 二三 三五

宇智の大海

神堀 忍 三六 四一

—上代語彙「大野」の原義—

吉永 登 四三 四四

「已然形についての一・二の問題」補論

—古屋彰氏に答える—

小久保 実編註校訂『堀辰雄全集』書評

高見 伯 四五 四六

金谷 治編『諸子百家』書評

北村 学 四七 四八

岡見正雄・林屋辰三郎編『文学の下剋上』書評

青木 晃 四八 五一

金谷 治編『思想史』書評

北村 学 五一 五二

第四十六号 一九七二年三月発行

「かく恋すらば」私解

木下正俊 一 一六

紫式部集の編者

清水好子 七 一八

『煤煙』論の前提

浦西和彦 一九 三三

森田草平著作目録

浦西和彦 三四 四八

軍王について

吉永 登 一 一七

五山文学に於ける金剛幢風

藤木英雄 八 二四

—古林清茂・竺儒梵僊・別源圓旨について—

中村幸彦 二五 三五

景樹と子規

—

『海に生くる人々』の

改題・改稿・発表経過等について

香川県志々島アクセント小報告

第四十八号 一九七三年七月発行

仮構の伝記

— 中世の人丸 —

五山文学の和様化

— 高峯顕日、規庵祖圓、夢窓疎石について —

菊丈評万句合興行における

年間前句題案内の『ちらし』

徳永直著作目録

安西冬衛年譜考証△その一▽

第四十九号 一九七三年十二月発行

川柳評万句合における

高番句・中番句・末番句

安西冬衛年譜考証△その二▽

徳永直『太陽のない街』発表年月・共同印刷争議・

設定年月・絶版について

開高健「パニック」読後

日本語のシンタクスにおける感嘆文ギョクター・ツェンク

寺川 央訳

大谷篤藏編『近世大阪藝文叢談』賛(書評)

延広 真治 八一 八五

第五十号 一九七四年六月発行

「大船の津守が占」考

政治家藤原行成とその環境

— 藏人頭時代について —

浄林房阿闍梨 豪誉の事など

— 金沢貞顕・貞将書状と太平記 —

『江戸生艶気樺焼』瑣談

あづまぶり鶴の一群

— 化政期北撰の狂歌結社「鶴の側」について —

岩藤雪夫の「鉄」と「賃銀奴隷宣言」

「已」然形にヤの添うた形」追考

終助詞「なむ」の反事実性

存在文

戦後日本思想史研究文献目録

第五十一号 一九七五年六月発行

権記試解

— 一条院御讓位記 —

佐久間寛台と「謠言粗志」

三代目三遊亭円馬年譜考証

昭和女 子太学 『近代文学研究叢書』40

「寺田寅彦」資料年表」の分析と批判

本田康雄著『式亭三馬の文芸』書評

神堀 忍 一一五

清水好子 一六二

岡見正雄 二九三

中村幸彦 三五四

水田紀久 四二五

浦西和彦 五九七

吉永 登 七五八

木下正俊 八九〇

佐伯哲夫 一〇五三

谷沢永一 一三二四

清水好子 一一三

黒田由美子 一一三

関屋俊彦 二四三

伊藤信一 三九六

大森一彦 六四七

延広 真治 七三八

中村幸彦著『近世文芸思潮』紹介 延広真治 八一 八三

安田保雄著『比較文学論考 続篇』書評 谷沢永一 八四 八六

大津山国夫著『武者小路実篤論』「新しき村まで」書評 谷沢永一 八六 八八

谷沢永一著『署名のある紙礫—私の書物随筆—』読後 助川徳是 八九 九二

第五十二号 一九七五年九月発行

吉永 登先生古稀記念上代文学特集

献辞 中村幸彦 i ii

イハノヒメの物語 吉井 巖 一 一二

古事記抄 中西 進 一三 二四

古事記訓詁二題 西宮一民 二五 三四

—修理固成・開天石屋戸而刺許母理坐也—

『富士と筑波』考 植垣節也 三五 三五

九世紀の歌と詩 小島憲之 四〇 五一

—『新撰万葉集』を中心として—

宴げと笑い 直木孝次郎 五二 六四

—額田王登場の背景—

短歌の語り 伊藤 博 六五 七五

—人麻呂の方法—

香椎廟宮 渡瀬昌忠 七六 八六

—志賀白水郎と旅人・憶良—

家持作「為幸行芳野離宮之時儲作歌」の背景と意義

興の展開 神堀 忍 八七 一〇六

—家持の依興歌二首の背景— 橋本達雄 一〇七 一二四

衾道を引手の山 橋本四郎 一二五 一三三

万葉歌解釈 一、二 坂本信幸 一三四 一三〇

—三七六三・二七五九歌についての私見—

潮干乃山と方便海 井村哲夫 一三二 一三四

「常しへに」と「若くへに」 森重 敏 一三五 一四三

—付けたり、「うったへに」「うたがたも」など—

ミ語法私按 木下正俊 一四三 一五五

万葉集の語順 佐伯哲夫 一五六 一六五

卷十六の特異性 浅見 徹 一六六 一七七

—語彙構造の上から—

万葉の鶴 犬養 孝 一七八 一八五

—しほひ・しほみち—

吉永 登先生略年譜 一八六 一八六

吉永 登先生著作目録 一八七 一九五

第五十三号 一九七六年十二月発行

屏風歌制作についての考察 清水好子 一 九

武蔵守師直の悪者像 青木 晃 一〇 二二

—太平記の文学的形象とその一つの享受—

芳洲書翰二通 水田紀久 三三 三三

二葉亭四迷と大阪朝日新聞

宮本百合子全集逸文について

昭和女『近代文学研究叢書』40  
子大学

「寺田寅彦」著作年表」の批判的検討

第五十四号 一九七七年九月発行

萬葉集題詞・左注の漢字音

中大兄はいづ九州から帰ったか

和泉式部日記の基調

西行説話の基本構想

——『撰集抄』から『西行物語』へ——

本目同根生

二葉亭四迷の『手帳』と「大阪朝日新聞」

諸家の鷗外論に対するいささかの疑念

山本勝治と「十姉妹」

『武道伝来記』の構成

戦後「政治と文学」論争・その後  
——主として中野重治・平野謙について

方法論信仰

第五十五号 一九七八年十二月発行

和泉式部日記の歌

京都・清涼寺蔵『滝口縁起』

高松敏男 三三 三五

浦西和彦 四〇 五七

大森一彦 五八 六六

木下正俊 一 一六

吉永 登 一七 二二

清水好子 三三 三五

青木 晃 三六 四三

水田紀久 四四 五七

高松敏男 五八 六六

嘉部 嘉隆 六七 七六

浦西和彦 七七 九三

大西義紀 九四 一〇一

吉田永宏 一〇二 一一一

谷沢永一 一一二 一二五

清水好子 一九

青木 晃 一〇 二〇

内藤悦永 一〇 二〇

吹田 桃李同窓

——四世栗柯亭、桃李園栗窓一門の狂歌師——

写生俳句における構図の類似

——虚子と素十の場合——

『日本近代文学大事典』

——第五卷の批評と補足を中心に——

丸山真勇著作目録（昭和39年以降）

関西大学図書館蔵『撰集抄』（解題補正）

『戲言養気集』の作者冥搜  
——初期笑話集の作者考の内——

吹田屋六兵衛書置

第五十六号 一九七九年十二月発行

廢曲（横山）考

小林秀雄におけるシエストフの受容

現代俳句の語種

『日本近代文学大事典』  
——第五卷の批評と補足を中心に——

『あわびの大將物語』（資料翻刻）

第五十七号 一九八〇年十二月発行

『三國伝記』と『胡曾詩抄』

『おかべのよ一物語』と『てこぐま物語』

副詞「随分」における用法の変遷

水田紀久 二二 三三

佐伯哲夫 三三 四三

林 眞 四四 五〇

服部 魏洋 五一 五五

青木 晃 五六 五六

林省之介 五六 六〇

高須素子 六〇 六五

関屋俊彦 一 一六

高松敏男 七 一四

佐伯哲夫 一五 二四

林 眞 二五 二九

橋本直紀 三〇 三五

橋本直紀 三〇 三五

黒田 彰 一一 二〇

橋本直紀 二二 三五

佐伯哲夫 三六 四三

『つばめの草子』とその典拠  
本庄陸男の家系  
橋本直紀 四三 五三  
桂 俊哉 五四 五七

第五十八号 一九八一年十二月発行

『三国伝記』と『和漢朗詠集和談鈔』  
黒田 彰 一九

『大山寺縁起』洞明院本における  
大山寺草創説話について  
山田 茂 一〇 一九

謡曲草子化の典型  
橋本直紀 二〇 四〇

—『百万』と『百万物語』の場合—

『資料紹介』『百万ものがたり』(解題と翻刻)  
橋本直紀 四一 五五

『嵯峨問答』(翻刻付 書誌)  
大内由紀夫 五六 六七

在外『目連経』資料  
黒田 彰 六八 七七

『書評』高松敏男著『ニーチェから日本近代文学へ』  
内田 満 七八 八二

第五十九号 一九八二年十二月発行

『三国伝記』と『和漢朗詠集和談鈔』(二)  
黒田 彰 一一〇

『横笛滝口の草子』の古版本について  
橋本直紀 一二六

—御伽草子本解明に寄せて—

物くさ太郎の口説  
青木 晃 二九 三三

『資料紹介』『大倭二十四孝』の単行板  
橋本直紀 三三 三七

—『二の宮花満』について—

上野本『注千字文』  
黒田 彰 三八 六九

第六十号 一九八三年十月発行

静嘉堂文庫蔵 伝為相筆  
「源氏物語賢木卷」の特色

武田有子 一 三二

『酒吞童子』の古版本について  
橋本直紀 三三 三六

—御伽草子本解明に寄せて(一)—

食満南北著作目録  
浅井 薫 三九 八四

『資料紹介』静嘉堂文庫蔵 伝為相本  
平山 悦 八五 一一六

「源氏物語賢木卷」翻刻

『國文學』第四二号—第六〇号 総目次  
二七 三三

『國文學』第42号—第60号 執筆者名索引  
1 1

第六十一号 一九八四年十一月発行

真光院尊海と『あづまの道の記』について  
鶴崎裕雄 一 一八

山脇和泉元宜をめぐって  
関屋俊彦 一九 二五

浮世草子末期における書肆升屋の動向(一)  
山本 卓 二六 三三

—書肆升屋伝攷並びにその作者の問題—  
田中真由美 三三 四〇

古葉略類聚鈔の系統に関する一考察  
田中真由美 三三 四〇

『為世の草子』と『三人法師』第三話について  
橋本直紀 四二 四九

—『三人法師』の成立は果たして古いか—  
太田 満 五〇 六〇

関西大学図書館蔵『為世入道物語』翻刻  
黒田 彰 六二 七六

身延文庫蔵『北野天神縁起』零本  
付片仮名古活字三卷本  
島津忠夫 七九 八〇

『書評』黒田 彰編著『身延文庫蔵宝物集中卷』  
付片仮名古活字三卷本  
島津忠夫 七九 八〇



第六十二号 一九八六年二月発行

浄土寺蔵 源氏物語絵扇面散屏風攷

— 国文学的立場からの報告 —

山本昌代 一 二六

升屋の蔵版目録と出版

— 浮世草子末期における書肆升屋の動向(三) —

山本 卓 二九 四六

狂言師 茂山久蔵英政伝一斑

関屋俊彦 四七 五六

『くはうせんしゆ物語絵巻』解題翻刻

橋本直紀 五九 八二

北條秀司著作目録

村田聰一郎 八三 一〇七

『封印切』劇評一覽

— 成駒家・松島家・河内家上演の劇評 —

金岡郁子 二八 一四一

『心中宵庚申』劇評一覽

— 初代中村鷹治郎上演以後の劇評 —

東 環 一四二 一四七

第六十三号 一九八六年十月発行

加藤磐斎伝記考証

藤 関 吉徳 一 一三

大阪のいろはかるた

肥田皓三 二四 三四

高原松平本『平家打聞』(影印・上)

黒田 彰 三五 九七

高崎市頼政神社蔵

鶴崎裕雄 九九 一三三

「諸大家連歌帖」翻刻

田中隆裕 一〇一 一三三

実録もの『中山記』解題と翻刻

山本 卓 一三三 一五〇

『宝物集』研究文献目録稿

黒田 彰 一五二 一五六

方言イメージの形成

大島 薫 一五二 一五六

沖 裕子 1 15

第六十四号 一九八八年一月発行

大伴坂上郎女「怨恨歌」攷

大濱眞幸 一 二二

聖藩文庫蔵曾我物語卷十二零本について(二)

黒田 彰 一 二二

— 頼朝、畠山父子の死 —

赤木文庫本『すみよし物語絵巻』の絵詞について(付・翻刻)

橋本直紀 二八 三七

開高健の文体

奥村 透 三八 五三

〈資料紹介〉島津家蔵 黎明館寄託能楽文書について

関屋俊彦 五四 九〇

〈資料紹介〉芥川龍之介全集逸文

浦西和彦 九一 一〇二

〈書評〉黒田 彰著『中世説話の文学史的環境』をめぐりて

阿部泰郎 一〇三 一〇八

付、死活杖の事

第六十五号 一九八九年一月発行

「大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌」攷

大濱眞幸 一 一四

— 書簡歌としての実用性をめぐって —

黒田 彰 一五 二八

『桃華因縁』統紹

— 注釈から説草へ —

大島 薫 二九 四四

宝物集諸本の系統

— 元禄本について —

山本 卓 四五 五五

『絵本敵討孝女伝』

— 実録種の説本化と出版書肆 —

武田麟太郎参考文献目録

児島千波 五六 八一

宇野浩二参考文献目録

小泉なおみ 八二二〇

〔書評〕鶴崎裕雄著『戦国の権力と寄合の文芸』

両角倉一 一二三三五

形容詞の文体的意味

沖 裕子 1 9

第六十六号 一九八九年十二月発行

物語と絵画

石原美紀 一 二六

―白描伊勢物語絵巻における伊勢物語享受―

大島 薫 二七 三七

宝物集諸本の系統

黒田 彰 三八 四五

―二卷本系後出の二系統について―

増田周子 五五 七九

応仁記と野馬台詩注

福島秀晃 八〇 九

河野多恵子参考文献目録

ローマ字を含む複合語について

第六十七号 一九九〇年十二月発行

木下正俊 一九

万葉集古写本の本文改変

渋谷律子 一〇 二

河海抄所引万葉歌の訓

石原美紀 二三 四〇

青表紙本源氏物語の文体

―花散里をたづねてぞとふ―

宝物集諸本の系統

大島 薫 四一 五九

―二卷本系本文の位置をめぐって―

外来語を含む専門語

福島秀晃 10 20

兵庫県城崎町方言における揺れ

佐伯哲夫 1 9

第六十八号 一九九一年十二月発行

万葉集旧訓回顧

木下正俊 一 二二

鷺流杭全家本『栗本実鑑集』二十について

関屋俊彦 一三 三四

―翻刻と紹介―

乾 裕幸 三五 四五

『蚊柱百句』をめぐる争点

神楽岡幼子 四六 六八

―惟中反論の意義―

山本 卓 六九 七八

長谷川光信の絵本と挿絵本

『元禄曾我物語』攷

―浄瑠璃利用と実録への展開を中心に―

〔資料紹介〕日本プロレタリア美術家同盟(略称P・P)活動日誌

―昭和七年三月十六日〜五月二十二日―

浦西和彦 七九 九三

物名による語順の制約

佐伯哲夫 九四 一〇八

現代日本語のモダリティについて

紙谷栄治 一〇九 一二〇

中村幸彦先生略年譜

中村幸彦先生著書目録

岡見正雄先生略年譜

岡見正雄先生著書目録

清水好子先生略年譜

清水好子先生著書目録

谷澤永一先生略年譜

谷澤永一先生著書目録

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生略年譜

肥田皓三先生著作目録

三六三五

第六十九号 一九九二年十二月発行

源氏物語と音楽

拾遺集における後撰集歌

井上重厚年譜稿

宇野浩二著書目録

万葉集動詞のアスベクト

――タリに上接する場合を中心に――

清水好子 一 一三

片桐洋一 一四 二八

竹内千代子 二九 六六

増田周子 六七 一一三

鍵本有理 二二三 二七

第七十号 一九九三年十二月発行

書写態度としての意改

――神宮文庫本万葉集の文字を通して――

宝物集冒頭の変容

――本文改変の過程と平家物語における享受――

北井勝也 一 一〇

大島 薫 二 二六

『諸道聴耳世間狙』の挿絵

関西大学図書館蔵『日本文学報国会

法人設立許可一件書類』翻刻

神楽岡幼子 二九 四六

浦西和彦 四七 九六

「くより出づ」と「くを出づ」

大蔵虎明本における仮定表現

鍵本有理 九七 一一一

第七十一号 一九九四年六月発行

芭蕉の存疑句

――重厚蒐集の芭蕉発句をめぐる――

竹内千代子 一 一四

拝啓岩波書店殿

山下 浩 一五 三六

――新『漱石全集』の問題点について――

宇野浩二『苦の世界』書誌的周辺

増田周子 三九 六六

筑摩書房版『藤村全集』全十七巻別巻の逸文

谷口優美 六二 九一

幸田文著作目録

浦西和彦 九二 一五〇

動詞「ようだ」について

紙谷栄治 一五一 一六八

第七十二号 一九九四年十一月発行

橘宿祢賜姓祝宴応詔歌の意義

――その誦詠者としての奈良麻呂をめぐる――

大濱眞幸 一 一四

顕昭における『拾遺集』とその本文

小倉嘉夫 一五 二七

後拾遺集における和泉式部歌享受

藤川晶子 二八 四四

――百首歌を中心に――

『今昔物語集』の構造・その生成と破綻

吉岡賢一 四五 六八

『天満千句』抄粗注

乾 裕幸 六九 八三

関屋俊彦著『狂言史の基礎的研究』(書評)

鶴崎裕雄 八四 八七

第七十三号 一九九五年十二月発行

献詞

木下正俊博士年譜

一 一六

木下正俊博士著作目録

七 一七

佐伯哲夫博士年譜

一八 二〇

佐伯哲夫博士著作目録

二二 三〇

萬葉・古今語雜考

高橋虫麻呂

— 虫麻呂歌集の元の姿を考える —

有間皇子自傷歌群試論

— 「自傷」の伝えるもの —

大伴家持の年中行事詠

— 初子・青馬節会歌を中心に —

「比米」と「此米」について

— 集中の鳥名の解釈をめぐって —

類聚古集の本文改変

— 独立異文の検討から —

二人の五条后

— 伊勢物語享受史より —

平安後期勅撰集における和泉式部歌享受

— 出典未詳歌を中心に —

宝物集撰述の周辺

— 真如観・菩提要集をめぐって —

千木の片殺神さびて

— 源平盛衰記難語考 —

海の合戦譚の兵法・語彙

— 付・『難波浦船戦記』翻刻 —

愛狂社新作狂言本について

— 近世、摂津池田に見る地域文化の一側面

— 山川正宣の「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」の場合 —

木下正俊 三二四

井村哲夫 四三 五二

小伏志穂 五三 六六

大濱真幸 六七 八〇

和田義一 八一 九二

北井勝也 九三 一〇三

金 任淑 一〇四 二八

藤川晶子 二九 三三

大島 薫 三四 四八

黒田 彰 四九 六一

青木 晃 六一 六九

関屋俊彦 七〇 九七

鶴崎裕雄 九八 三二

西鶴俳諧注釈

— 『烏賊の甲や』独吟百韻 —

幕末期姫路の貸本屋目録

— 樊圃堂灰屋輔二『貸本目録』 —

宇野浩二家系図について

薄田泣菫の書簡一通

〈資料紹介〉日本プロレタリア美術家同盟

— (略称 P・P) 活動日誌(承前) —

— 昭和七年三月十六日〜五月二十二日 —

小説表現における叙述層の重層構造

「〜よりはじめて」という言い方

— 「より」と「を」の交替 —

〈書評〉竹内千代子編『炭俵』連句古註集

第七十四号 一九九六年八月発行

南の空を照らす月影

— 童女成仏をめぐる表現 —

談林派の古典受容

— 『談林十百韻』の場合 —

宇野浩二未発表書簡六十三通

〈かかり〉と〈うけ〉の交差関係と語順

— 従属句「〜テ」「〜ナガラ」を中心に —

〈最終講義〉我らは何して

— たゞ今の壁 —

竹内千代子 二二三 二三四

乾 裕幸 二三五 二五〇

山本 卓 二五二 二五〇

増田周子 二五二 二五七

佐伯哲夫 二五八 二六〇

浦西和彦 二六一 二七一

土部 弘 二七二 二八五

鍵本有理 二八六 二九五

楠元六男 二九五 二九六

大島 薫 一一 一五

乾 裕幸 一六 二七

増田周子 二八 六七

磯部 文 六八 七九

木下正俊 八〇 八八

〔最終講義〕類義成分の先後

— 時面語と時点語のばあい —

佐伯哲夫 八九 九七

第七十五号 一九九七年三月発行

萬葉集における「遊」をめぐる

— (一)「遊」・「遊(一)」と「アソブ」・「カル」など —

神堀 忍 一 二八

〔伊勢物語哥之注 月樵筆〕の成立と性格

藤川 晶子 二九 四〇

— ソウル大学図書館蔵

〔伊勢物語注〕について —

金 任淑 四一 五六

静嘉堂文庫本『源氏露』をめぐる

中葉 芳子 五七 六七

茂山久蔵英政と鏡師青家

関屋 俊彦 六八 八〇

近世期以後の宇野浩二家

増田 周子 八一 九二

宇野浩二未発表書簡百三十通

増田 周子 九三 一五二

— 広津和郎・田中直樹・舟木重信・森谷均・中村光夫・小島政二郎・日本文学報国会編輯部宛 —

音便の読癖

遠藤 邦基 一五三 一六六

— 表記を改変せずに読み方を変えること —

〔資料紹介〕関西大学図書館蔵『詞八衢』版本の書き入れについて

— 富樫広隆の『詞八衢』継承の一過程 — 鍵本有理 一六七 一七六

第七十六号 一九九七年九月発行

〔半手不忘〕(巻第十一・二・三・八三)をめぐる

小伏 志穂 一 一四

万葉集目録における仙覚寛元本と文永本との差異

— 巻十七・十九を中心に — 北井 勝也 二五 二五

『萬葉集禽獸蟲魚草木考』の成立について

和田 義一 二六 四九

書評・関西大学図書館影印叢書 第二巻

関屋俊彦解題『能面図』

西野 春雄 五〇 五二

紹介・関西大学図書館影印叢書 第一巻

片桐洋一解題『古今序開書』

田中 登 五三 五五

関西大学文学部国文学科五十年表

五六 一五五

『國文學』第一号—第七十五号 総目次

一六二 一七

『國文學』第一号—第七十五号 執筆者名索引

1 5

第七十七号 一九九八年三月発行

ゐでのしがらみ「薄可毛」考

小伏 志穂 一 一三

『土左日記』定家筆本と為家筆本

片桐 洋一 一四 二七

『伊勢が書きたる十六段』考

金 任淑 二八 三九

— 古注釈書に見る『伊勢物語』の生成 —

関西大学図書館蔵『源氏物語』の本文

中葉 芳子 四〇 五二

— 書入れを中心に —

春登『萬葉集名物考』と本草学

和田 義一 五三 七六

宇野浩二「枯木のある風景」論

増田 周子 七七 八六

— その素材・その他 —

連声の表現効果

遠藤 邦基 八七 一〇五

— 促音型連声はなぜ少ないか —

詠嘆表現における主格表示

鍵本 有理 一〇六 一二三

書評 田中登著『古筆切の国文学的研究』

三角 洋一 一二四 一三八

書評・関西大学図書館影印叢書 第一期第三卷

関屋俊彦解題『勸進能并狂言尺番組』 天野文雄 二九二三

書評・関西大学図書館影印叢書 第一期第五卷

山本卓解題『浮世草子集』 高橋圭一 二二三二五

第七十八号 一九九九年三月発行

神堀 忍教授 古稀記念特集

神堀 忍博士年譜 一 一九

神堀 忍博士著作目録 二〇 二九

「梅花宴」冒頭歌の意匠 大濱眞幸 三〇 三五

嘉暦伝承本万葉集の本文について 北井勝也 四〇 四七

佐保川の薄ら氷 小伏志穂 四八 五九

—天平勝宝八歳十一月二十三日の飲宴伝誦歌—

荒木田嗣興と『萬葉品類鈔』 和田義一 六〇 九七

冷泉家時雨亭文庫蔵『小野宮殿集』の構成と成立 片桐洋一 九八 一二

(翻刻) 冷泉家時雨亭文庫本小野宮殿集 小倉嘉夫 一二三 一二三

『夫木和歌抄』の資料となった『和泉式部集』 藤川晶子 一二三 一三六

冷泉為満の『伊勢物語抄』 高木輝代 一三七 一四七

—その注釈方法と家意識—

関西大学図書館蔵『源氏物語』の本文 (二二) 中葉芳子 一四八 一六〇

—その書写活動と性格— 田中 登 一六二 一七三

『古筆名葉集』記事内容考

「大坂ノ陣」・敗者の文学 青木 晃 一七四 一八一

—例えば『大坂籠城記』『大坂落城記』など—

大蔵弥右衛門家蔵『預ヶ道具覚帳』について 関屋俊彦 一八二 一九七

連歌師宗長の肖像 鶴崎裕雄 一九八 二〇七

孝行集と『道安仕母事』 黒田 彰 二〇八 二二六

初期俳諧注釈 乾 裕幸 二二七 二四三

—『大坂獨吟集』重安獨吟百韻—

長崎喧嘩一件 山本 卓 二四四 二六四

—巷説・実録と浮世草子—

香西頼山と『七種宝納記』 中村隆嗣 二六五 二七七

椎本才磨の正徳三年歳旦帖など他二点 竹内千代子 二七八 二八六

—付、和州兵庫の園麿のこと—

関大本『許多脚色帖』の成立 神楽岡幼子 二八七 二九九

西尾武陵俳事年譜稿 森嶋 亮 三〇〇 三二二

『西鶴名残の友』の考察 長谷あゆす 三三三 三三四

—座と癒しの文芸—

川端康成未発表書簡二十通 浦西和彦 三三五 三三九

—中河与一あて書簡十七通ほか—

「青紙」から「平地」へ 遠藤邦基 三四〇 三五四

—八行頭子音の唇音退化を証する資料として—

現代日本語の自動詞と他動詞 紙谷栄治 三五五 三七二

万葉集における連体修飾 鍵本有理 三七三 三八八

—現代語との比較を通して—

『毘沙門堂本古今集注』声点付漢語語彙索引

齋藤 文 三九四〇五

書評・関西大学図書館影印叢書 第一期第六卷

山本 卓解題 『西川祐信集』上・下巻

松平 進 四〇六四〇

書評・関西大学図書館影印叢書 第一期第七卷

神楽岡幼子解題 『青本黒本集』

木村八重子 四二四三

第七十九号 一九九九年九月発行

類聚古集の本草項目とその注記

— 萬葉集の本草学的研究の萌芽 —

和田義一 一一四

色彩からみた『源氏物語』の場面性

— 光る君の照らした世界 —

早川やよい 一五三四

『花屋抄』の本文意識

— 関大図書館本の紹介を兼ねて —

中葉芳子 三五四三

『和泉式部日記』の享受に対する一視角

— 『和泉式部集』日記歌再考 —

藤川晶子 四四 五五

『大坂獨吟集』出典考修補

谷崎潤一郎未発表書簡十二通紹介

— 佐藤續 森川喜助、北尾録之助、川田順宛 —

乾 裕幸 五六 七〇

書評・関西大学図書館影印叢書 第一期第八巻

浦西和彦解題 『葦分船』

堀部功夫 七八 八一

第八十号 二〇〇〇年三月発行

初期の定家本古今和歌集

— 関西大学図書館所蔵建保五年奥書本瞥見 —

片桐洋一 一一六

『花屋抄』の注釈態度

— 「おさなき人・女達」のために —

中葉芳子 一七 三〇

大藏虎政と平尾

関屋俊彦 三 四五

宗因点俳卷三点（翻刻）

乾 裕幸 四六 五五

助詞「へ」を忌避すること

— 拗音に対する音感との関係から —

遠藤邦基 五六 七一

中世における疑問表現について

紙谷榮治 七二 八二

第八十一号 二〇〇〇年十一月発行

乾 裕幸教授追悼号

乾 裕幸 一 八

弔詞

〈連句は曲解の文学〉説批判

乾 裕幸 九 一八

乾 裕幸教授年譜

乾 裕幸教授著書目録

乾 裕幸教授著述目録

書評集

藤原俊成の私家集書写活動

田中 登 七八 八七

静嘉堂文庫本『源氏露』小考

— 唐人の贈り物 —

三代目歌右衛門轟貞の戯画摺物

中葉芳子 八八 九八

貴司山治「日記」一九三四年（昭和九年）（一）

神楽岡幼子 九九 一〇九

谷崎潤一郎未発表書簡（久米正雄宛）一通紹介

浦西和彦 一〇二 一四三

— 及び『国文学』第七十九号掲載翻刻の訂正 —

中谷元宣 一四三 一四八

— 及び『国文学』第七十九号掲載翻刻の訂正 —

中谷元宣 一四三 一四八

書評 増田周子著『宇野浩二文学の書誌的研究』  
増田周子編『宇野浩二書簡集』 田中 劭儀 一四九—一五二

第八十二号 二〇〇一年三月発行

『夜寝覚拔書』の解説法

海を渡る白楽天

—海龍教化説をめぐって—

「文学難波戦記」注

上司小剣「鱧の皮」論

昭和期の『萬朝報』について

—萬朝報社長・長谷川善治の大日本雄弁会  
講談社社長・野間清治宛書簡の紹介—

貴司山治「日記」一九三四年（昭和九年）

四つ仮名の読癖

—「鼻二入ル」の注記の意味—

第八十三・八十四合併号 二〇〇二年一月発行

片桐洋一教授古稀記念特集

献詞

片桐洋一教授著述目録

片桐洋一教授略年譜

七夕歌の「霞」

—憶良作巻八・一五二八番歌をめぐって—

家持二季歌の手法

—「しかすがに」と逆接の助詞「を」をめぐって—

契沖の品物（動物・植物）解釈について

—萬葉代匠記（精選本）惣釈を中心に—

拾遺抄の作者名表記

『和漢朗詠集』の配列における和歌の役割

—付項目を中心に—

『和泉式部正集』に記された敦道親王伝

—定家本との関わりをめぐって—

『和泉式部日記』に見える作者意識と場面性

枕草子 郭公考

—諸本の本文からの考察—

物語系古筆切三種

—竹取・源氏絵詞・大鏡の各断簡—

月下詠嘆とその構図

—『伊勢物語』西の対の段における—

ソウル国立中央図書館本『伊勢物語朱雀院髓腦』

—解題と翻刻—

二つの形代物語

—形容表現から見た源氏物語の人物描写—

『源氏物語』における催馬楽

静嘉堂文庫本『源氏露』小考（二）

—唐の舞—

石田正博 四〇—四九

和田義一 一五〇—一五五

金 石哲 一六六—一七八

長谷川友紀子 一七九—一九三

岸本理恵 一九四—二〇二

藤川晶子 二〇三—二一七

磯山直子 二一八—二二九

田中 登 二三〇—二三六

泉 紀子 二三七—二四八

金 任淑 二四九—二六五

橋本美香 二六六—二八三

浜田かすみ 二八四—二九三

中葉芳子 二九四—三〇三



『八雲御抄』と順徳院の和歌活動

三木麻子 二〇四三八

阿仏尼の天神信仰

福留瑞美 二九一三三

—『安嘉門院四条五百首』の「えがらの宮の百首」に見る—

片桐洋一教授所蔵 古今伝授書解題

田中まさ 三三二六五  
他十三名

新出連歌資料「(仮題)天文三好千句三つ物」

鶴崎裕雄 二六六二八〇

「大蔵虎明と天海」序説

関屋俊彦 二八二二九一

『統明鳥』のかたち

藤田真一 二九二二〇六

—夜半亭撰集論—

上司小剣「木像」・その文学的転機

荒井真理亜 三〇七三三七

宇野浩二未発表書簡六十八通

増田周子 三三八三五六

—洪川驍宛六十七通、竹村書房宛書簡一通—

前田河広一郎と「日米時報」

浦西和彦 三五七三七三

杖つきの「乃」の字

遠藤邦基 三五四三三

—言語遊戯としての見立ての文字—

前田河広一郎の英文による短篇小説

浦西和彦 1 8

「THE TWENTIETH CENTURY」(二十世紀)の紹介

### 第八十五号 二〇〇二年十二月発行

昌益における「五憲法」

堀部功夫 一 一五

紀延興「雄山記行」(上司家蔵) 翻刻

荒井真理亜 一六 三五

貴司山治「日記」一九三六年(昭和十一年)(二三)

浦西和彦 三六 六九

(書評) 乾裕幸著『俳句の本質』

加藤定彦 七〇 七三

神楽岡幼子著『歌舞伎文化の享受と展開 観客と劇場の内外』を読む

荻田 清 七四 七九

書評 和田芳英著『ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』

神谷忠考 八〇 八二

〈悠々行〉「コップ」一九三三年(昭和八年)

浦西和彦 八二 八九

### 第八十六号 二〇〇三年二月発行

宇野浩二未発表書簡・印南寛宛二十五通

増田周子 一 一七

貴司山治「日記」(四)

浦西和彦 一八 八七

—昭和10年1月・昭和11年11月・昭和13年1月〜9月—

川のほとりに牛は見えけり

遠藤邦基 八八 一〇六

—類形字体の識別と誤認—

### 第八十七号 二〇〇三年十二月発行

「この花の一よ」はなぜ折れたのか

小伏志穂 一 一一

—娘子から広嗣へ—

和泉式部集宸翰本の再検討

岸本理恵 一三 二七

—正集との比較から—

後期軍記「朝倉始末記」

瀬戸祐規 二九 四三

—伝本の分類、その性格—

久米正雄「三浦製糸場主」

荒井真理亜 四五 五九

—その改稿をめぐって—

天理図書館蔵『實方集』の表記

林田定男 六一 八〇

— 定家真筆説への疑問 —

関西大学図書館蔵『勸進能并狂言尽番組』総索引

恵阪 悟 八二五六

第八十八号 二〇〇四年二月発行

伊勢物語の高官の女

山本登朗 一 一六

— 二十三段第三部の二つの問題 —

『源氏小鏡』

橋本美香 一七 三〇

— 梗概化の手法 —

伝後光厳院筆物語六半切は『寢覚』の断簡か

田中 登 三 一四五

— 付、伝冷泉為秀筆夜の寢覚物語切について —

木へんに春の花見

遠藤邦基 四七 六七

— 「壺碑」の流行と漢字教育 —

第八十九号 二〇〇五年二月発行

改作本『夜寝覚物語』の構想

小田成江 一 一五

— 大君遺児と女主人公第三子・第四子の性の改変について —

中世私撰集と古筆切

田中 登 一七 二五

蕪村の「奥の細道」

藤田真一 二七 四四

— 「壺碑」のえがき方 —

宇野浩二未発表書簡十九通

増田周子 四五 七〇

— 神屋敷民蔵宛二通・河原義夫宛十五通・田中秀吉と

河原義夫両名宛一通・他一通 —

天理図書館蔵『一宮紀伊集』の表記

林田定男 七 八四

— 定家真筆説への疑問 —

英訳本 BOTCHAN の考察

— 「なまじ」の対訳 like にて —

長井香奈子 1 15

第九十号 二〇〇六年一月発行

改作本『夜寝覚物語』の序について

小田成江 一 一三

《経正》の演出

恵阪 悟 一五 三〇

— アイの変遷をめぐって —

『朝倉始末記』と『太平記』

瀬戸祐規 三 四五

— 『太平記』の影響と享受の観点からの変遷 —

西本願寺本三十六人集の転呼音表記

遠藤邦基 四七 六九

— 十二世紀初期の非古典仮名づかい —

「いづこ」の行方

林田定男 七 八二

— 仮名資料読解の問題点 —

基督教用語「天主」について

陳 贇 1 16

— その成立についての考察 —

第九十一号 二〇〇七年三月発行

吉田永宏教授古稀記念特集

献詞

吉田永宏教授略年譜

一 一六

吉田永宏教授著述目録

一七 二五

『貫之集』巻四の解釈

北井佑実子 二七 三六

— 素寂本を手がかりに —

角倉切後撰和歌集考

立石大樹 三七 四九

『和泉式部日記』は一人称作品

藤川晶子 五二 六三

「春別」と「春の別れ」

—伊勢物語第七十七段の問題点—

山本登朗 六五 七六

類聚歌苑の古写断簡

田中 登 七九 八五

餓鬼草紙放

黒田 彰 八七 一〇四

—曹源寺本第三、四段について—

化人の語る仏道教化

大島 薫 一〇五 一二九

—『宝物集』の構想—

『蒲生文武記』

鶴崎裕雄 一二二 一四一

—軍記と和歌の接合—

鎮宅靈符神信仰研究史の整理

瀬戸祐規 一四三 一五三

『阿婆縛抄』研究史稿

山極哲平 一五五 一六五

酒の町池田の輝き

岡田健太 一六七 一八五

—『誦諸異服箱』の文雅—

玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）の俳諧活動

藤田真一 一六七 一八五

都の錦作片仮名本『内侍所』筆蹟考

竹内千代子 一八七 二〇〇

宮沢賢治の初恋と短歌

山本 卓 二〇二 二一一

—不可解な歌をめぐって—

池川敬司 三三三 三三三

明治期の大阪の雑誌

荒井真理亜 三三五 三六六

—『短文芸』細目—

宇野浩二童話「王様の嘆き」にみるハイインリッピ

増田周子 二四七 二五七

ハイネ「ロマンツェロ」受容

中谷元宣 二五九 二六八

谷崎潤一郎「痴人の愛」論

—（お伽断の家）の意味をめぐって—

山内謙吾資料（関西大学総合図書館所蔵）について

—黒島伝治未発表はがき二通の紹介—

浦西和彦 二六九 二八二

佐多稲子の五〇年問題

北川秋雄 二八三 三〇〇

—「みどりの並木道」のことなど—

三島由紀夫「金閣寺」研究

井迫洋一郎 三〇一 三三六

「婉という女」の参考資料

堀部功夫 三三七 三三七

『沈黙』論

田中 葵 三三五 三五七

—草稿の発見を踏まえて—

玄月の『蔭の棲みか』論

黄 奉 模 三五九 三七三

近代大阪の演能場

関屋俊彦 三七五 三九四

助詞「は」の「わ」表記

遠藤邦基 三五五 三四四

—いろは歌の影響を通して—

日本大学図書館蔵『土左日記』の表記

狩野理津子 四一五 四三三

—ハ行転呼音に関して—

徳川美術館蔵『基俊集』『登蓮集』の表記

林田定男 四四五 四四八

—定家真筆説への疑問—

関西大学工学部「文章論入門」（2006年度春学期）指導の実践報告

小伏志穂 四四九 四六〇

第九十二号 二〇〇八年三月発行

遠藤邦基教授古稀記念特集

献詞

遠藤邦基教授 略年譜

遠藤邦基教授 著述目録抄（除 研究発表・講演）

一 一  
一 一

持統天皇御製歌僻案

—「春過ぎて夏来るらし」をめぐる—

大濱 眞幸 一三 二六

『萬葉集』卷十三の編纂

『貫之集』解釈上の問題点

—素戔本を手がかりに—

垣見 修司 二七 四〇

雲州本後撰和歌集の草稿本的性格

—付、伝冷泉為尹筆四半切について—

北井 佑実子 四五 五八

『歌苑抄』断簡考

阿仏尼「いまくまのの百首」における熊野信仰

立石 大樹 五七 七三

殿本 佳美 七三 八一

古筆学より見たる冷泉家所蔵本の意義(続)

藤原定家筆「小記録切」について

福留 瑞美 八三 九三

田中 登 九五 一〇五

関大本鷲畔翁狂言《寝代り》復曲

福王流「脇語」の名称をめぐる

林田 定男 一〇七 二一六

関屋 俊彦 二七 三二九

吉田神道の「神祇道霊印」と「鎮札」「守」

叡山文庫真如蔵『十講卷積』翻刻

山極 哲平 一四三 一五五

大島 薫 五七 一八二

和歌三神と地域文学論

近世筆記生成の一過程(二)

鶴崎 裕雄 一八三 一九八

瀬戸 祐規 一九九 二〇〇

『松染情史秋七草』論

赤穂時代の葉山嘉樹書簡二通

中尾 和昇 二二一 二二六

浦西 和彦 二二七 二三三

宇野千代「色ざんげ」論

—語りスタイルの意味—

荒井 真理亜 二三五 二四九

宇野浩二未発表書簡五通—中野重治宛三通・井上靖宛二通

増田 周子 二五一 二五六

平安時代における「あくる日」と「またの日」

立本 礼子 二五七 二七五

仮名遣書と読み癖

—仮名遣書に於ける「ト読ム」の意味—

遠藤 邦基 二七七 二九六

『初心假名遣』の四つ仮名

書記言語における新語の成立

狩野 理津子 二九七 三一一

—「鬱胸」の場合—

橋本 行洋 三三三 三三七

「う」と「だろう」

東京における「させていただく」

長井 香奈子 三三九 三五四

松本 修 三五五 三六七

大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法

原敬の振り仮名改革

—「大阪毎日新聞」における字音仮名遣いの実態—

高木 千恵 83 96

井口 佳重 59 82

「慚愧・慙愧」の意義変遷

—「慚愧」の場合—

陳 贇 37 57

下一段他動詞と対応する自動詞のセル形について

〈驚き・感慨〉を表すモノダ文の構造変化

紙谷 榮治 19 36

北村 雅則 1 17

—近世以降を中心に—

第九十三号 二〇〇九年三月発行

伝二条為明筆六半切拾遺集の性格

田中 登 一 八

宸翰本和泉式部集の書誌的研究

岸本 理恵 九 二二

板木は語る

—『伊勢物語』宝暦六年十月刊本をめぐって—

関口一美 二三 三六

『夜寝覚物語』の改作方法について

—改作の構想と『狭衣物語』—

小田成江 三七 五〇

新出・蕪村評点帖

—南山城の俳諧と蕪村—

藤田真一 五一 六三

曲亭馬琴『敵討枕石夜話』考

中尾和昇 六五 七六

佐佐木信綱の中国漫遊

鄒 双双 七七 九五

角田浩々歌客の未掲載稿「大阪の新聞紙と文学」

—と関西文学の状況— 高松敏男 九七 一〇六

文字をめぐる思弁から

—文章と文字との対応関係についての覚書—

乾 善彦 一〇七 一二三

『初心假名遣』の開合

—アウ型・オウ型動詞を対象に—

狩野理津子 二二三 二三七

### 第九十四号 二〇一〇年二月発行

「伝二条為藤筆四半切後撰和歌集」考

立石大樹 一 八

阿仏尼の賀茂社信仰

—俊成・為家の賀茂社百首との比較に見る—

福留瑞美 九 二三

『夜寝覚物語』の改作方法について(続)

—改作の構想と『狭衣物語』—

小田成江 二五 三六

『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記

—振り仮名の機能と表記形態の特徴—

田中巳築子 三九 五三

蕪村と伏見の仲間たち

藤田真一 五五 六九

馬琴と大坂

—『月水奇縁』成立に関する一考察—

中尾和昇 七 八八

「と入れ言葉」の増加について

山里 優 1 17

### 第九十五号 二〇一一年二月発行

伝坊門局筆後撰和歌集小考

—四季部を中心に—

立石大樹 一 二三

鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法

—古筆切を手がかりに—

中葉芳子 一三 二三

陽明文庫蔵 伝後醍醐天皇筆本『和漢朗詠集』

—増補詩歌からの位置づけ—

恵阪友紀子 二五 三三

錢稻孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯

—佐佐木信綱宛錢稻孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通—

鄒 双双 三五 四四

火野葦平「画壁」考

—『聊齋志異』との比較を中心として—

増田周子 四五 六〇

津村節子「海鳴」論

—改訂の意義—

岩田陽子 六二 六九

近世初期俳諧における「やさし」の用法

—『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について—

田中巳築子 七二 八三

戦中期における海外邦字新聞の字音仮名遣い

—台湾の訳本をめぐる諸問題—

井口佳重 17 37

松本清張「砂の器」

—台湾の訳本をめぐる諸問題—

李 彦樺 1 16

第九十六号 二〇二二年三月発行

浦西和彦教授古稀記念特集

献詞

浦西和彦教授略年譜

浦西和彦教授著書目録

浦西和彦教授参考文獻目録

平安末期における「けこのうつはもの」

——「伊勢物語の高安の女」補遺——

中世における『源氏物語』梗概本の古筆切

『夜寝覚物語』の構造

——『狭衣物語』との関わり——

『平成新修古筆資料集』補訂稿

尾上柴舟の「高野切」研究

伝坊門局筆本後撰和歌集統考

宗祇出生地小論

——寺院領・荘園との地縁の関係に求めて——

曾良本『おくのほそ道』の校閲現場

春坂百回忌記念俳書展覧会

子規と義太夫

上司小剣「絶滅」から

『灰燼』への改変をめぐる

大正十五年 改訂版『宿命』

——大正八年刊 初版本との比較において——

『寒風』成立の経緯

——川端康成と日戸修一の関係を軸にして——

火野葦平「糞尿譚」論

——その典拠「聊齋志異」「画皮」との比較——

翻訳家銭稻孫と日本人との交遊

——谷崎潤一郎、岩波茂雄を中心に——

坂口襍子「蠅螂の歌」論

李良枝「刻」論

津村節子の少女時代

——福井市順化尋常小学校と東京市高田第五尋常小学校の成績表——

『源氏物語』の「みやび」

——『徒然草』第三九段を中心に——

古典文学に見る「ものづくり」表現

——『徒然草』第三九段を中心に——

近世初期俳諧の用字考証

——『當流籠拔』における「悶る」について——

史料紹介「和泉流狂言太夫野村家由緒」

谷澤永一未発表資料紹介

「徒然草」に関する一考察

松本清張文学の台湾における伝播と受容

『良人の選定』紹介

福森裕 一三三—一五二

西村峰龍 二五三—二七二

増田周子 二七三—二九四

鄒 双双 二九五—三〇八

彭 妍 三〇九—三三三

陳 乃 綺 三三五—三六九

岩田陽子 三四一—三五五

鳥山紫織 三五七—三七二

鍵本有理 三七三—三七九

田中巳榮子 三八一—三九四

関屋俊彦 三五五—四〇四

増田周子 四〇五—四一九

李 彦樺 一九—三七

堀部功夫 一—一七

荒井真理亜 三三三—三三三

第九十七号 二〇一三年三月発行

伝藤原公任筆『古今和歌集』考

立石大樹 一 一三

堀河題による日吉社奉納百首

福留瑞美 一五 三三

尾上柴舟の実践的古筆学

村山美恵子 三五 五

『武家不断枕』と『播磨相原』

山本 卓 五三 六三

馬琴読本と豫讓の故事

中尾和昇 六五 八三

「ジュニア小説」と虚栄心

岩田陽子 八五 九三

仮名遣から見た近世初期俳諧集

田中巳榮子 九五 二二

『宇治拾遺物語』「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」考

辻 陽史 考

— 高等学校で学ぶ「古文」の教材を読む —

大島 薫 51 66

ことばのタブーとその言い換え

郡山 暢 29 49

日本語・ベトナム語・中国語における

漢語の対照研究序説 LE NGOC CHANH TIN

雑誌『推理』と松本清張

李 彦樺 1 10

第九十八号 二〇一四年三月発行

村雲切にみる『貫之集』の本文

北井佑実子 一 一〇

— 定家校訂以前について —

『公時集』考

殿本佳美 二 一九

『為家七社百首』の折りの系譜

福留瑞美 二 三三

— 『俊成五社百首』の影響と、為家の独自性について —

『水麿』表紙の古筆学的意義

村山美恵子 三三 四七

— 古今集について —

蕪村・太祇の色紙一双

藤田真一 四九 六五

— みちのくからの来客 —

護持山朝光院天性寺所蔵『天性寺聖地藏尊縁起』および

田中巳榮子 九三 一〇七

「天性寺地藏菩薩縁起」五種紹介

辻 陽史 六七 九二

『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて

山際 彰 1 14

『最近』と『近日』

第九十九号 二〇一五年三月発行

『万葉集』卷十七・三九三—三歌

大石真由香 一 一四

「海邊都祢佐良受」試論

立石大樹 一五 二五

伝藤原家隆筆土半切『古今和歌集』考

寺田 伝 二七 三七

尊田親王の能瀬切『古今集』について

福留瑞美 三九 五三

為家七社百首における漢籍の影響

村山美恵子 五三 六八

「水麿」表紙の古筆学的意義 その2

— 和漢朗詠集について —

護持山朝光院天性寺所蔵

辻 陽史 六九 八九

『天性寺聖地藏尊縁起』の成立過程

— 地藏菩薩の利生譚から岸和田城史譚へ —

俳人の終焉記

藤田真一 一九二〇七

『江戸紫』モデル考

黒澤 暁 二〇九二七

翻刻『忠臣規矩順從録』(一)

山本 卓 二九二七六

広津柳浪「黒蜩蛭」論

平田恵美子 二七九一九二

—歌舞伎とのかかわりを中心に—

黄塵万丈を彷彿して

鄒 双双 一九三〇五

—日中戦争期の北京における日本人結社「燕京文学社」について—

三島由紀夫「翼」論

石丸佳那 二〇七二三二

—青年に託された告白—

司馬遼太郎「俄—浪華遊侠伝—」と堺事件

森 瑠偉 二二三二四九

書評『清水好子論文集』第一巻〜第三巻

山本淳子 二五二二五七

近代的メディアのルビの構造と

字音仮名遣いの変相

井口佳重 59

複合格助詞「において」の史的考察

陳 韻 31

松本清張「黒地の絵」論

李 彦樺 1 30

〔校閲〕 藏本真由 (くらもと まゆ / 本学大学院生)